

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H02341

研究課題名(和文) ネパール高地トクチェ村周辺の定住/非定住の研究 高地アジア交易路沿の生存様式解明

研究課題名(英文) Study on Sedentary / Nomadism Around Tukuचे Village, Highlands of Nepal: Elucidation of Living Style along Highland Asia Trade Route

研究代表者

中谷 礼仁 (Nakatani, Norihito)

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：30267413

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は申請後に発生したCOVID-19によって現地調査が不可能となった中央ネパールの一集落の総合調査方法を国内の高地集落の分析に用い検討したものである。経済活動と流通経路とを含んだ広域的理解による高地の生業基盤の把握を普遍的方法として捉えた。日本における研究対象地として高地において特色ある産業を歴史的に有していた秋田県阿仁川流域(マタギ)、徳島県那珂川流域(林業)、中国地方高梁川、日野川、甲斐川流域(たたら製鉄)を取り上げ、それら産業のための流通と生活様式、生産連関について比較考察を行った。結果として高地、低地間に相補的な産業流通が歴史的に存在し、その中間に交易用の地域があることを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は地域の史的評価を周辺地域との動的な人的、物的、文化的、経済的流通を合わせて考えようとした。これは近年では領域史やイタリアから発祥したテリトリーオという学的枠組みに近親性を持つ。本研究の独自性は、研究対象を遠隔、高地の地域としたことである。従来の類似研究において、その最終的な対象は産業、政治、文化的中心地に向けられることが多かったのに対し、本研究ではその逆として、遠隔高地の存立に目を向けたところに独自性があった。日本国内における現地調査地の高地ではその土地に見合った独自の産業が発達しているとともに、それは特に水系によってつながる他地域との需要関係に密接な関係があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study used a comprehensive survey method for highland villages in Japan following COVID-19 that prevented field surveys in central Nepal highland settlements. This research adopted a comparative approach to understanding livelihood foundations in highland regions, including economic activity and distribution pathways. The highland villages of Ani River Basin in Akita Prefecture (Matagi), the Naka River Basin in Tokushima Prefecture (Forestry), the Takahashi River Basin in Chugoku region, the Hino River Basin and the Hii River Basin (Tatara iron making), have been selected as research objects, which all historically had unique industries. Comparative assessments have been conducted on the circulation, lifestyles, and production links that sustain the villages' industries. This research revealed that there has been a historically complimentary industrial distribution between highland and lowland areas, with trading regions positioned in the intermediary zones.

研究分野：建築史

キーワード：集落調査 高地集落 水系調査 僻地の流通

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 緒言

山岳部を代表とする高地の居住圏の生活文化や歴史について近年大きな見方の変更があった。ジェイムス・C・スコットらはその圏域をゾミア (ZOMIA) と呼び、それら一帯に居住する多数の部族は、低地を占有する国家原理から高地へ逃避・移動することによって独自の生存様式を保持してきたとした。本研究は以上のような主張を作業仮説として受け入れ、アンナプルナの麓に位置し交易中継地であった中央ネパール・トクチェ (Tukuche) とその地を出自とする成員に、三年間の詳細調査を遂行する目標を立てた。山間の居住様式には拠点となる集落と、一見相反する成員の移動性が併存するのではないかと。動的観点を含むことによって山間地域を出自とされている民族の生存様式を包括的に再検討することこそ現代居住様式の幅を空間的かつ歴史的に格段に広げる知見を提示しうると考えた。

(2) COVID-19 発生による調査対象の変更

しかし本研究の申請以降に発生した COVID-19 によって、以来約 2 年間の渡航禁止 (2022 年 3 月より条件付き入国再開) さらに現地協力者における調査隊の受け入れ不安が発生した。その後も交渉を続けたが 2022 年中盤になっても事態は進展しなかった。さらに日本から複数の研究者を随行する際の現地発症の可能性、大幅に縮小された調査年数における所定目的の達成の困難などを考慮し、トクチェ調査について調査を断念した。しかし COVID-19 の蔓延下において可能な範囲での調査を、日本国内の高地研究による比較研究に見出し、これを実行した。そのため予算を国内比較調査、実現可能になった場合のネパール調査の二つに配分した。結果的に実現しなかったネパール現地調査分予算については研究費を国庫に全て返却した。よって以下の報告は、比較事例、方法論構築のために日本国内にて行なった調査についての報告となる。

2. 研究の目的

本研究は地域の史的評価を周辺地域との動的な人的、物的、文化的、経済的流通を合わせて検討する総合的調査と分析である。これは近年の建築史・都市史周辺では「領域史」や「テリトリーオ」とよばれる学的枠組みに近親性を持つ。しかしながら従来の類似研究にあって、その最終的な調査対象は産業、政治、文化的中心地に向けられることが一般的である。

それに対し、本研究ではその方向性とは逆に、中心地とは遠く隔たった高地の居住域を研究の主眼とした。遠隔の高地が、いつ、なぜ、どのようにして成立し持続しえたのかという問いを、広域的視点を含めることによって見出そうとした点に独自性がある。さらに今後の比較研究に役立てるための、高地集落に対する普遍的視座と分析方法論を抽出することを試みた。

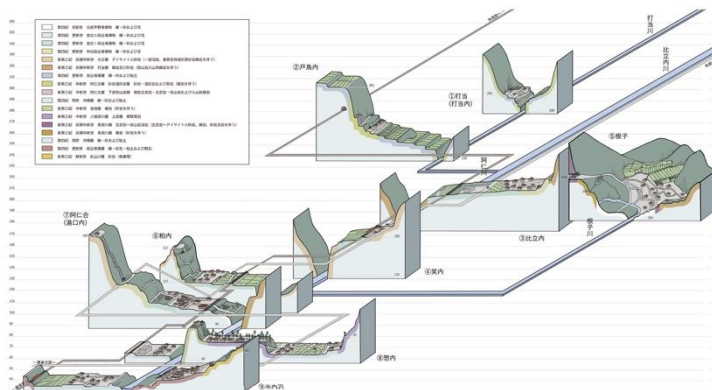


図 1 河川と各集落をつなげる連続的地域特性把握図

3. 研究の方法

(1) 高地集落把握のための、水系にもとづく低地から高地までの広域研究

具体的な研究は事前の文献調査と現地調査とを行い、その後分析考察を行った。現地選定にあたっては、

- ・過去には物流の主要手段としての河川交通を有していた、低地から高地までをつなぐ水系
- ・特に高地において独自の生産物が産出されたこと、さらに他地域にそれらが流通した地域の視点から複数の水系候補を選定した。対象地域について以下の項目をまとめることとした。

(2) 研究項目

・事前の文献研究：人口推移、地形・地質、気候、交通史、災害史、産業・生業史、宗教・風俗、民家

・現地調査：ヒアリング、集落構造分析、現状の生活・生業の確認

・分析考察：現地調査を経た上での絶対標高断面と地質・地形に基づく連続的地域特性把握図 (図 1) の作成によるまとめ

結果として以下の 3 地区を各年に調査し考察を積み重ねた。以下 () 内は対象地の特徴ある産業を示す。

2020 年度 秋田県阿仁川流域 (マタギ・鉄鉱石)

2021 年度 徳島県那賀川流域 (林業)

2022 年度 中国地方高梁川、日野川、斐伊川流域 (たたら製鉄)

4. 研究成果

国内調査を終え以下の成果を得るに至った。

(1) 高地集落の定義

まず高地集落とは絶対標高で決定される地域ではなく、他の地域との流通関係を含めてその生存が規定される山間部の地域と考えるべきである。この定義から高地集落は以下のような特徴を持つ。

集落内の有限の成員について、その生活を成立させる最低限の環境を持つ
生活上の不足または利潤をさらに産むための特産物を産出し、他地域と流通する

(2) 水系による流通の特色

しかし上記2項目を成立させるためには、他地域との流通を目的として水系沿いに発展した経済地域が間欠的に立地する必要がある(図2)

よって上記の特徴を高地集落の成立の重要要素として、阿仁川、那賀川、高梁川、日野川における事例を紹介する。

・秋田県阿仁川流域(マタギ・鉄鉱石)

阿仁川の上流地域は比較的狭雑な地形であり、そのため川は物資の運搬機能を持っていない。上流に位置する打当内などの集落は中世より河岸沿いの道を通じて阿仁合への物資交換を行っていた。阿仁合は近世から明治時代の間、鉱山の繁栄により発展し、同時に下流の能代港への水上交通と街道も促進された。経済と交通的な変化により、下流の集落は上流の集落と比べて都市様式を多く持つようになった。明治に、マタギによる薬製造を成功させた根子集落(210m)は高地集落の特徴を持ち、その薬は北海道から富山にかけて販売された。

・徳島県那賀川流域(林業)

那賀川の中流部には、その蛇行部に音谷田ノ久保(430m)という高地集落が存在する。田ノ久保は那賀川から垂直に約300メートルの高低差がある。住民たちは限られた地形に段々畑を作り、山頂からの天然水流を灌漑用水に用いた。大正から昭和の時期には林業の発展により、山間部に位置する田ノ久保の村民たちは経済的な収入源を持つようになった。林業の後、村民は地形を活かして農業を安定的に運営している。明治初年から現在まで、住民は必要な生活必需品を購入するために、下流の和食(経済中心地)にて特産物の卸や購入を行っている。

・中国地方高梁川、日野川、斐伊川流域(たたら製鉄)

たたら製鉄は中国山地の河川沿いの集落に大きな影響を与えた。上流の山岳地帯は削減する鉄穴流しによって地形が変化し、一方で下流では河川の土砂による堵塞によって沿岸の形態を変化させた。大正時代以降のたたら製鉄の衰退後、河川上流の山間部の集落は以前の鉄穴流しから地形に基づいて稲作に移行した。また高梁川中流域には井倉や足見(ともに410m)が存在し、河面から約400メートルの垂直距離をもつ。そこでは寒暖差を利用してタバコや葡萄栽培が行われている。下流の経済中心地(新見市、高梁市)と流通している。

(3) 他地域への展開・高地集落に対する普遍的視座

上記の日本国内での実地成果を通じて、他地域の高地集落とも比較し得る普遍的視座の端緒として上記を獲得できた。

さらに実地調査において作成した連続的地域特性把握図は、GISにより平面に分布する集落構造を絶対標高を含む地形断面と地質の上に展開したものであり、このように地理的特性を組み合わせることで、各集落の特徴を示すだけでなく、河川をいわば基準線と

できた。これによって高地集落には、河川を控える経済的中心地からの高低差によって検討し得ることも敷衍された。例えば中国山間部における高地集落は河川の高低差から検討すると、日本の場合と比較可能なレンジにある(図3 出典:『中国自然地理概要 修正版』商務院書館1982に加筆)。以降、将来のアジアの高地集落調査において今回の知見を活用していく。

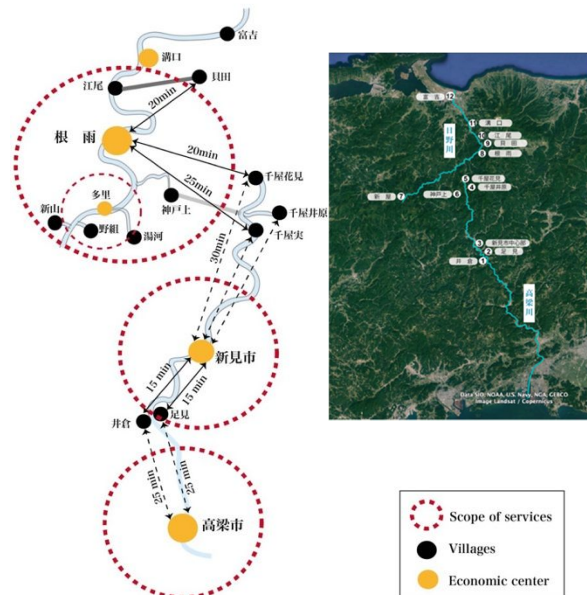


図2 高梁川、日野川における高地集落と集積交易地

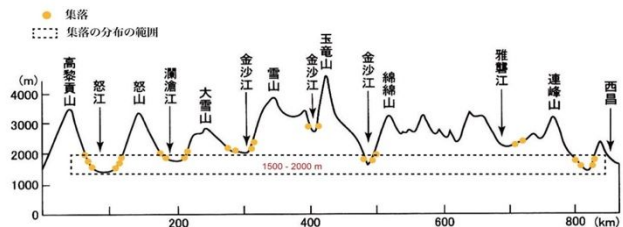


図3 中国雲南省における山、水系、集落立地分布

謝辞: 本研究を継続するに当たり以下の研究者から指導を得た。記して謝意とする。酒井哲弥(地質学・島根大学)横山 智(文化地理学・名古屋大学)菊地 暁(民俗学・京都大学人文科学研究所)木下剛(造園学・千葉大学)松田法子、恵谷浩子(景観学・奈良文化財研究所)福島啓人(都市史・奈良文化財研究所)前川歩(建築史・畿央大学)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 NAKATANI Norihito, SHOJI Kosuke, SUZUKI Akiyo	4. 巻 online
2. 論文標題 THE PART 1 OF RESEARCH ON <MILLENNIUM VILLAGE> : A STUDY ON THE METHODOLOGY OF CANDIDATE SITES OF <MILLENNIUM VILLAGE> AND THE CURRENT LOCATION CHARACTERISTICS OF THE SITES RECORDED IN THE HEIAN PERIOD ' S LITERATURE <WAMY? RUIJU SH?>;	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 221 ~ 231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.87.221	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hua Yiling, Nakatani Norihito	4. 巻 2023
2. 論文標題 Study the influences of ethnic Han and ethnic Bai on Jidi village ' s modern Tibetan dwellings in Shangri-La, China	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Asian Architecture and Building Engineering	6. 最初と最後の頁 1 ~ 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13467581.2023.2205476	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中谷礼仁
2. 発表標題 幾千もの村を見出す方法: 平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地プロットを用いた 千年村 抽出方法と地域持続へ向けての試み
3. 学会等名 日本地球科学惑星連合 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中谷礼仁
2. 発表標題 鋼の構築様式、近代におけるその成立条件
3. 学会等名 日本地球科学惑星連合 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 東野友紀、中谷礼仁
2. 発表標題 『和名類聚抄』批判に基づく東北地方における長期持続集落の発見手法 秋田県阿仁川流域における集落分析を一例に 千年村研究 その16
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塚原 朋輝、中谷 礼仁
2. 発表標題 近世大垣城下における開渠型上水の配置と都市設計の関係 -千年村研究その17-
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中谷 礼仁、荻野 智樹、東野 友紀、齋藤 湧一郎、齋藤 拓、吉田 彩華
2. 発表標題 「日本荘園データベース」の比定地をもとにした国内荘園地プロットの紹介と古代郷プロットとの比較分析の一端 -千年村研究その11-
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 東野 友紀、中谷 礼仁
2. 発表標題 シラライから白老へ 近世・近代史料によるアイヌ集落の空間的変容と他者との共生
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

各年度作成、関係機関に送付した報告書はWebサイトにて公開している。文字数制限のため分冊2冊目以降は1冊目のURLの末尾を変更すれば確認可である。
2021年度阿仁川調査報告書
https://www.nakatani-seminar.org/nnl-wp/wp-content/uploads/2023/06/阿仁川調査報告書Part_1.pdf
同URL末尾Part_2.pdf
同URL末尾Part_3.pdf
2021年四国山地・那賀川調査報告書(3分冊)
<https://www.nakatani-seminar.org/nnl-wp/wp-content/uploads/2023/01/%e9%82%a3%e8%b3%80%e5%b7%9d%e5%a0%b1%e5%91%8a%e6%9b%b8Part-1.pdf>
同URL末尾Part_2.pdf
同URL末尾Part_3.pdf
2022年度高地・流域研究 中国山地高梁川・日野川流域調査報告書(3分冊)
<https://www.nakatani-seminar.org/nnl-wp/wp-content/uploads/2023/05/%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E5%B1%B1%E5%9C%B0%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%EF%BC%BFpart-1.pdf>
同URL末尾Part_2.pdf
同URL末尾Part_3.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	横山 智 (YOKOYAMA SATOSHI) (30363518)	名古屋大学・環境学研究科・教授 (13901)	
研究協力者	酒井 哲弥 (SAKAI TETSUYA) (90303809)	島根大学・地球科学科・教授 (15201)	
研究協力者	菊地 暁 (KIKUCHI AKIRA) (80314277)	京都大学・人文科学研究所・助教 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------